

九 東京都経済農業協同組合連合会主催

肉豚共進会出陳豚調査

宮川正夫、 菅原兼太郎、 大橋昭也

1. ま え が き

都内一円から出陳された本共進会出品豚の調査結果を分類整理することによって、一応都内産肉豚の水準が把握出来るし、又、このことからいわゆる肥育技術の改善のための示唆が得られるのではないかと考え若干の整理を行い考察し、関係者の参考に資するため本調査を実施した。

2. 調 査 方 法

出品豚は、ヨークシャー種、バークシャー種及びその一代交配種は、生後240日以内、ランドレース種及びその一代交配種は生後210日以内で体重は概ね90Kgから100Kg以内と規定されているので、今回は大略の傾向を知るため、品種の相違は一応除外し、豚産肉能力検定に定める屠体測定方法に従い調査を行い、整理に当っては、枝肉格付等級別（本共進会における入賞順位の格付）の分類を主として行った。

なお、出品豚の生後日令については、すべて出品申込書によって行った。

3. 調 査 結 果

(1) 出品豚の品種別・性別頭数

出品豚は総計77頭で、その内訳は、ホ1部雌豚52頭、ホ2部去勢雄豚25頭で、その品種別出品頭数はホ1表のとおりであった。

第1表 品種別、性別出品頭数

Y		B		YB		YL		計	
♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂
27	17	11	3	9	5	5	0	52	25
44		14		14		5		77	

(2) 出品豚の日令別・体重別頭数

出品豚の日令については何れも出品規程の範囲内にあったが、その生体重については、概ね90Kgから100Kg以内という規程よりはみ出たものかなりの頭数に達していた。これは給与飼料等の肥育条件にもよるが、特にYBについては50%が100Kg以上のものであったことは、YやBの純料種と比べ増体速度の優れていることを証明したものである。

又、85Kg以上100Kg未満のものについて出品頭数に対する比率をみる

と、Yは2.7%、Bは71.4%、一代交配種47.3%であるが、一代交配種については、100kg以上のものが、この外36.8%もあり、なお、これを日令の面からみると、YはBより増体速度がやや優るようであるし、またYLの80%が200日未満になり最も肥育日数が短かくてすむ傾向にあり、産肉経済性の良いことがうかがわれる。

第2表 日令別出品頭数

	190日以上200日未満	200~210	210~220	220~230	230~240	計
Y	2	9	10	8	15	44
B	0	1	7	6	0	14
YB	1	0	3	4	6	14
YL	4	0	0	1	0	5
計	7	10	20	19	21	77

第3表 体重別出品頭数

	75kg 未満	75kg以上 80kg未満	80 ~85	85 ~90	90 ~95	95 ~100	100 ~105	105 ~110	110 ~115	115 ~120
Y	1	2	4	9	8	15	2	2		1
B		1	2	5	4	1	1	0		
YB				2	3	2	5	1	1	
YL				2	2	1				
計	1	3	6	18	17	19	8	3	1	1

第4表 日令別、体重別、出品頭数

(1) Y

	75kg 未満	75kg以上 80kg未満	80 ~85	85 ~90	90 ~95	95 ~100	100 ~105	105 ~110	110 ~115	115 ~120
180日未満										
190~200				2						
200~210	1			3	1	2	1			1
210~220		1		1	2	6				
220~230			2	1	2	3		1		
230~240		1	2	2	3	4	1	1		

(2) B

	75kg 未満	75kg以上 80kg未満	80 ~85	85 ~90	90 ~95	95 ~100	100 ~105	105 ~110	110 ~115	115 ~120
180日未満										
190~200										
200~210				1						
210~220		1	1	1	3		1			
220~230			1	3	1	1				
230~240										

(3) YB・YL ()内 YL

180					(1)					
190~200				1 (2)	(1)					
200~210										
210~220					2		1			
220~230				1		2 (1)	1			
230~240					1		4		1	

(3) 出品豚の級別日令別及び級別体重別頭数

出品豚の優秀賞、優良賞をA, 良好賞をB, 努力賞をC, その他をDとして、この格付け結果を日令別に分類すると、おら表のとおりであった。

入賞率については、純粋種に比べ一代交配種がかなり良く特にYLについては、その出品頭数が少なかったが、生肉利用についてやや難点があるといわれているにも拘わらず、200日未満の短期肥育のものでかなりすぐれた屠体のあったことを示した。

即ち、A級に格付けされたものはY 9.1%, Bで7.1%, YBで21.4%, YLで20.0%となり、D級については同じく56.8%, 42.8%, 20.0%となり屠体の評価において、一代交配種が明らかにまさっていた。

級別体重別出品頭数については、おら表のとおりで、A級に評価されたものは85kg以上105kg未満に何れも入るが、YBについては、95kg以上でもかなりすぐれた屠体のあったことを示している。

これは従来のYやBの出荷適期体重が、90kg前後であるといわれていることを裏付けるものであり、一代交配種においては、やや体重の大きなもので背脂肪が薄くあがり上もの評価される屠体が得られるので、95kg前

後が適期とされていることと、良く一致したが、ただYLについては、出品頭数が少なく、これらの傾向が把握出来なかった。

第5表 級別、日令別出品頭数

	Y				B				YB				YL			
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
180日未満																1
以上 未満																
190～200	1		1										1	1	1	1
200～210	1	1		7				1								
210～220		1	2	7	1	2	2	3	1	1	1					
220～230			4	3		2	1	2	2		2					1
230～240	2	2	4	8							1	5				
計	4	4	11	25	1	4	3	6	3	1	4	6	1	1	2	1
%	9.1	9.1	25.0	56.8	7.1	28.5	21.4	42.8	21.4	7.1	28.5	42.8	20.0	20.0	40.0	20.0

第6表 級別、体重別出品頭数

	Y				B				YB				YL			
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
75kg 未満				1												
75kg 以上 80kg 未満				2		1										
80～85			3	1			1	1								
85～90	2		2	5		2	1	2	1				1	1	1	
90～95	2	2	1	3	1		1	2		1	1	1				2
95～100		1	4	10					1	1	1					1
100～105		1	1			1			1		2	3				
105～110				2												
110～115												1				
115～120				1												

(4) 背脂肪の厚さと等級との関係

枝肉評価の最も重要な指標となる背部脂肪層(肩、背、腰の平均)の厚さと等級との関係についてみると、表7表のとおりで、A級に格付けされたものは1～2を除き何れも薄く上っており、C級、D級と比べ明かに枝

肉重量に占める赤肉率のすぐれていることを物語っている。

第 7 表 級別 背脂肪の厚さ別頭数

	Y				B				YB				YL				
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	
2.5 ^{cm} 以上～2.7 ^{cm} 未満	1		1					1									
2.7 ～2.9	2			4	1				1				1	1			
2.9 ～3.1	1	3	4	2	1	1		1	1		1						
3.1 ～3.3			6	2	1	2	2		1	1	2					2	
3.3 ～3.5		1		9			1	3			1	2					
3.5 ^{cm} 以上				8				1				4					1

(5) 出岳豚の級別屠殺解体成績

出岳豚の級別屠殺解体成績についてみると、中 8 表のとおりであった。即ち、枝肉評価の最も重要な指標となる背脂肪の厚さにおいて明らかに上位のものほど薄くなっており、今回の調査では赤肉生産量の指標となるロースの太さについては、A 級を除き測定していないが上位のもの程赤肉率の多いことを示唆している。

背脂肪の厚さと肉連を有する屠肉歩留について、その絶食状態がまちまちではあったが、一応の傾向を示していた。

第 8 表 出岳豚の級別屠殺解体成績

	生後 日	令 Kg	屠体 重 Kg	屠肉 歩留 %	屠体 巾 cm	屠体 長 cm	背腰長		背脂肪の厚さ				椎骨 数	ロースの断面	
							I	II	肩	背	腰	平均		周囲 長 cm	長径 ×短径 cm
A 級	215.4	91.6	60.2	65.7	32.6	91.7	77.4	67.6	38.4	2.07	2.81	2.91	21.33	15.23	5.13 ×4.06
B 級	214.9	92.1	60.4	65.5	32.1	91.4	77.7	66.9	40.0	2.16	2.94	3.03	21.20		
C 級	217.6	92.4	61.5	66.6	32.8	93.2	78.9	68.0	40.4	2.21	3.02	3.09	21.19		
D 級	220.5	93.8	62.6	66.7	33.4	91.7	77.6	67.0	44.0	2.52	3.20	3.38	21.18		
総平均	218.4	93.0	61.8	66.4	33.0	92.1	77.9	67.3	41.8	2.34	3.07	3.20	21.20		

また、屠体の長さについては、近時椎骨数と肉連があるとされており、これは特に背腰長 II に顕著であるとされている。このことはロース、ベーコンの重量比が大なることを示すものであり、枝肉評価の一指標となる訳で、事実等級格付と椎骨数との間に若干の肉連がみられるようである。

なお、仮りに20kg到達日令を85日として20kgから屠殺時までの間の1日平均増体重を試算すると548gとなり、出品豚平均の発育はほぼ順調に推移したものと考えられ、又格付等級と生体重の関連からも肥育技術に示唆を与えるものと思う。

(6) 出品豚の疾病発生状況

出品豚77頭のうち9表に示すとおり74%に寄生虫或は内臓病変の認められたことは、都下養豚経営の将来に大きな障碍となると考えられるので、これが万全の予防措置を講ずる必要がある。

今その57頭のうち、単独の一病変の認められるものが73.6%、合併症の認められるもの26.3%であり、また地帯別にみると、区市部で76.1%、町村部で71.4%とあまり差がないようであり都下全般の傾向と考えられる。

種類別にみると、肺虫が51.3%を占め、ついで肺炎の23.6%、肝向竇炎の18.0%、肋膜炎5.5%となり、特に肺虫についてはその肥育に及ぼす影響について未だ解明せられていないが、やはり飼料の利用性、増体速度等にかんがりの影響を及ぼすものと考えられるので、中間宿主であるミミズの駆除及び床の清潔乾燥に心掛けることが必要であり、完全な駆虫薬の得られない現状では、これらの予防措置による以外その対策がないと云われている。

肺炎については、原因として飼養管理の失宜による単純な肺炎であるか、又、伝染性のVPP様肺炎等であるか、又は粉餌による異物性肺炎であるかについて今後検討する必要がある。

肝向竇炎の原因については、寄生虫に基くものを主としその他有害飼料の持続的給与によるものが多いので、給与飼料に対する注意や、蛔虫、肺腫、囊虫やその他肝臓を本来の寄生部位としていない幼若虫が一時的に寄生するために起るものであるから、駆虫の励行によって防ぎうるので、この励行は是非共必要な措置で特に蛔虫等については、母体の虫卵による汚染等からも子豚に伝播するものであるから繁殖豚に対しても心掛けるべき対策と考える。

第9表 疾病発生状況

区	肺	肝	肺	肺	肺	肺	肺	肺	肺	肺	計	出品 頭数
	虫	間	助									
武蔵野市	3		1		1	3					8	9
小金井市	1		1								2	2
三鷹市	3			1							4	4
調布市	3		3		1	1					8	8
小平市		1									1	2
立川市	1									1	3	3
町田市	1										1	3
入王子市	2										2	6
青梅市	2				1						3	3
国分寺町	1	1					1				3	4
久留米町	2		2						1		5	6
村山町												1
東村山町			1								1	1
由木村	3				1						4	5
福生町												1
羽村町	3		1		1						5	7
瑞穂町			1					1			2	2
秋多町	2	1						1			4	6
日の出村	1										1	2
計	28	3	11	1	1	7	2	2	1	1	57	77

4. むすび

以上出陳豚について若干の考察を行った訳であるが、勿論その品種や大きさもまちまちであり、又飼養条件も異なるためこの結果から一概に断定することは出来ないが、一応従来から分析されていた傾向と殆んど合致していたようである。

なお、本共進会に出陳せられた肉豚は一応各地域から選抜された資質優良なものであると考えられることから、全般的水準についてはこれよりその資質が低下するものと考えられるので、今後は、全体の水準を引き上げるため、

種豚の選択には特に留意し、飼料要求率、肥育速度、肉質等産肉経済性の高い肉豚の造成に努める必要があろう。

五、ブロイラー飼養標準設定のための飼養試験

殿内正芳、清水明良、井崎金二、名倉清一

目的、ブロイラーの飼養について粗蛋白質および可消化養分総量を適宜に増減した飼料を給与し増体重、飼料効率におよぼす影響を検討し、粗蛋白質と可消化養分総量の最適配合割合を求める。

方法、供試雛 WC×NH 1回500羽

試験期向 第1回 昭和38年9月2日—11月17日まで

第2回 昭和39年1月6日—3月16日まで

の各々10週間

試験区及び給与飼料

区分	羽数	4週まで	第1回5週からの飼料	第2回5週からの飼料
1	100	CP-TDN	CP14 — TDN68	CP14 — TDN73
2	"	20-68	14 — 78	16 — 68
3	"		16 — 78	16 — 73
4	"		18 — 68	16 — 78
5	"		18 — 78	18 — 73

給与方法は粉餌にて1日4回給与し不断に自由摂取させ、緑餌、グリット等は給与しなかった。

供用育雛器は餌付より2週まではバスケットアルダー温源付使用、3週より4週までバスケットアルダー温源なし使用、5週より10週まで中雛ゲージを使用した。

調査項目 育成率、体重、飼料摂取量、飼料要求率、体成分、飼料費等で各週毎に測定を行ない、体成分は試験終了後左ももの肉を皮付りまま細碎して、水分、脂肪、窒素について定量した。

試験結果

第1回 (1) 試験の経過

6週までは各区共に順調であったが、7週以降尻ツツギ、腫瘍、骨折等で斃死又は淘汰した外にコリザー様症状鶏が7羽発生したが治療の結果治療し発育には大きな影響はなかった。